

2021年11月13日(土)

英米文化学会 第165回例会

準動詞を比較対照する学習活動による 学生の英文理解への意識変化

東京薬科大学 平田 稔

研究発表内容

序論	1. 日本の学校英語教育の問題点 [研究の背景・動機 ①]	1
	2. 日本の英文法教育の問題点 [研究の背景・動機 ②]	2-3
	3. 準動詞に焦点を当てる理由 [研究の目的]	4
	4. 大学生の準動詞の理解度	5-7
本論	5. 質問紙調査実施のための準動詞を意識させる授業方法	8-11
	6. 質問紙調査の実施	12
	7. 質問紙調査の結果	13-22
結論	8. 質問紙調査の結果に関する考察	23-24
まとめ	今後の研究に向けて	25
	参照文献, 参考文献	26

1. 日本の学校英語教育の問題点 [研究の背景・動機 ①]

塾や予備校での個別指導の経験から気づいた日本の英語教育の3つの大きな問題点

- ① 英語の発音をほとんど教えないので、音声が英語学習の基盤になっていない。
⇒ なぜ教えないのかについては、英米文化学会第36回大会で研究発表
演題『日本の英語教育において発音教育が軽視されて来た原因と理由に関する考察
—発音教育軽視から重視への方向転換の可能性を探る』
- ② 学校の授業で時間をかけている英文法が身についていない。
⇒ 今回は英文法の準動詞分野に焦点を合わせた研究発表
- ③ 英文の理解の方法と目標を示さない。
⇒ どの程度日本語を使えばよいのか、直読直解に至る方法等
⇒ **私の英語の授業はこの3つの問題を常に念頭に置いて実施している。**

2. 日本の英文法教育の問題点 [研究の背景・動機 ②-1]

塾や予備校での個別指導で様々な英文法教材を使って教えて来た経験から気づいた日本の高等学校における英文法教育の問題点

- ① 学校英語教育において、最初に品詞をまとめて教えないこと
 - ② 最初に学習する文型が文法教材を通して貫かれていないこと
 - ③ 各文法項目が独立していて相互関係が見えにくいこと
 - ④ 入試の文法問題を解くための英文法になってしまっていること
 - ⑤ 文法がリーディングを始めとする4技能に十分に生かされていないこと
- ⇒ これらが原因で基本的な英文法が習得から程遠いという結果になっているのではないか
- ⇒ この現状が大学の英語教育に持ち越されて来ているのではないか

2. 日本の英文法教育の問題点 [研究の背景・動機 ②-2]

高校生が英文法、特に準動詞と品詞・文型の理解が出来ていない典型例

① to不定詞の用法がどの用法で使われているかを正確に答えられない

② 動詞のing形が、動名詞か現在分詞のどちらか判別出来ない

⇒ 単独の現在分詞を「進行形」と答える生徒が圧倒的に多い

③ 動詞形が、述語動詞の過去形か過去分詞形かを正確に答えられない

⇒ **準動詞のいくつは見かけ上は同一だが、品詞が異なることにより、文中での機能も**

異なるので、準動詞を十分に理解するためには品詞と文型の知識が必要不可欠

⇒ **品詞と文型理解の重要性を学生に気づかせるために、3種の準動詞の語法解説を積**

極活用してみたらどうだろうか、という思い付きがこの研究の発端

→ 『準動詞の品詞と機能一覧表』（スライド11と12）の作成へつながる

3. 準動詞に焦点を当てる理由 [研究の目的]

準動詞全体を理解することにより想定可能な効果の検証

- ① 動詞、名詞、形容詞、副詞の主要 4 品詞を同時に扱え、一覧表にすることによって各品詞自体の理解と、各品詞の文中での機能の理解の両方を深められる。
- ② 今まで学生が曖昧にしていた文法分野の理解が明確になり、英文を理解し易くなる。
- ③ 文法的役割としての現在分詞・過去分詞を同時に説明できる。
- ④ 英文の難度が高くなるほど準動詞の理解が必要になることが分かる（要検証）。
- ⑤ 英語で最も分かりにくく、最も重要である過去分詞の説明が効果的に出来る。

(薬袋, 2000)

⇒ 今回の研究対象は①と②、特に②が中心。

⇒ 準動詞を対象にすると、より多くの文法分野をカバーできる利点がある。

4. 大学生の準動詞の理解度 (1)

スライド 3 『2. 日本の英文法教育の問題点[研究の背景・動機 ②-2]』で説明した問題意識があったので、今回の質問紙調査実施校とは別の勤務先の理系私立大学の2年生の定期試験で、準動詞を含む動詞形を答えさせる問題を何度か試してみた。 次の**スライド 6**が2019年に実施した問題の一部である。受験者数は146名だった。

試験の実施要領等は次の通り。

- ① 授業で使っている金星堂社のテキスト『Good Health, Better Life 健康的な生活から学ぶ大学総合英語』の本文の一部を使用。
- ② 授業ではテキストに出ている準動詞の解説をした。
- ③ 出題範囲と出題形式については、試験前に学生に説明した。
- ④ この出題形式は学生にとって2回目であった。

4. 大学生の準動詞の理解度 (2)

2019年度の 試験問題から 抜粋

※設問箇所は
黄色でハイラ
イトした

Many people like (a) eat raw oysters, and raw oyster bars are (b) grow in popularity both at home and abroad. However, people are usually unaware of dangerous bacteria that (c) exist in oysters. (d) Eat (e) undercook oysters can put you at risk of bacterial infections, including Vibrio bacteria.

Vibrio bacteria thrive in coastal salt water and live in oysters. Since oysters feed by (f) filter water, the bacteria can concentrate in their tissues. Oysters, which contain these harmful bacteria, do not look, smell, or even (g) taste different from any other oyster. Therefore, a better idea is (h) avoid (i) eat raw oysters so that you will not be (j) infect with the bacteria.

(a) 1. eat 2. ate 3. eating[現在分詞] 4. eating[動名詞]

(b) 1. grow 2. grew 3. grown 4. growing

(c) 1. exist 2. exists[単数現在形] 3. existing[動名詞] 4. existing[現在分詞]

(d) 1. Eat 2. Ate 3. Eating[現在分詞] 4. Eating[動名詞]

(e) 1. undercook[原形] 2. undercooking[現在分詞] 3. undercooked[過去分詞] 4. undercooked[過去形]

(f) 1. filter[原形] 2. filters[単数現在形] 3. filtering[現在分詞] 4. filtering[動名詞]

(g) 1. taste[原形] 2. tastes[単数現在形] 3. taste[複数現在形] 4. tasting[現在分詞]

(h) 1. avoid[原形] 2. avoiding[現在分詞] 3. to avoid 4. avoided[過去分詞]

(i) 1. eat 2. ate 3. eating[現在分詞] 4. eating[動名詞]

(j) 1. infected[過去形] 2. infected[過去分詞] 3. infecting[現在分詞] 4. infecting[動名詞]

4. 大学生の準動詞の理解度 (3)

スライド6の10個の設問の正答率と正答数 → *(c),*(g)は、準動詞とは関係のない問題

(a) likeの動名詞目的語を選択する問題	71.9%	105/146	⇒ 現在分詞の誤答 23.3%
(b) 現在進行形で現在分詞を選択する問題	69.2%	101/146	⇒ 過去分詞の誤答 27.4%
*(c) 関係代名詞直後の動詞形を選択する問題	46.6%	68/146	
(d) 動名詞主語を選択する問題	80.0%	116/145	
(e) 前置修飾の過去分詞を選択する問題	84.8%	123/145	
(f) 前置詞の動名詞目的語を選択する問題	45.2%	66/146	⇒ 現在分詞の誤答 44.5%
*(g) 否定文の動詞の原形を選択する問題	54.8%	80/146	
(h) 補語になるto不定詞を選択する問題	65.1%	95/146	⇒ 過去分詞の誤答 17.1%
(i) avoidの動名詞目的語を選択する問題	69.9%	102/146	⇒ 現在分詞の誤答 24.7%
(j) 受動態の過去分詞を選択する問題	83.6%	122/146	

⇒ 期待していたような高い正答率を得られず、より効果的な授業の追求を開始。

5. 質問紙調査のための準動詞を意識させる授業方法

今回の質問紙調査実施のため、準動詞の理解度を確認した大学とは別の私大理系の大学2年生のオンライン授業で次のことを実践した。

- ① National Geographic Learning社の*2A READING EXPLORER*のReading文を用いて準動詞に意識と注意が行く資料を12回分(6Units×2)作成[資料1・スライド9]
- ② 『準動詞の品詞と機能一覧表』をハンドアウトとして配付[資料2・スライド10&11]
- ③ ①と②を相互に参照して、準動詞の使い方を確認するように指導した。また、テキストのReading以外の部分でも、準動詞が出て来た場合は極力説明を加えた。

※ この授業は、複数の教員が共同で担当する授業で、今期もオンライン授業となり、授業の半分はオンデマンド形式になってしまった。そのため、毎回の授業で自由に使える時間は10-15分程度しかなく、解説に多くの時間は割けなかった。当然、学生の作業を見ながら授業を実施することが出来なかったため、学生が一覧表をきちんと活用してくれていたのかは分からない。

資料 1 (一部抜粋)

A

- 1 For uncounted generations,/ trillions upon trillions of coral polyps / **have lived and died**,/ **leaving** behind a
/pólips/ 現完・継続 現分・分構
- 2 material / **called** limestone. **Prized** / throughout the history,/ limestone was used/ **to construct** the the Great
過分・後修 過分・分構 to 不・副・目
- 3 Pyramids of Egypt,/ as well as many churches and castles. Yet / the greatest limestone structures / in the world /
- 4 are build underwater,/ by the coral polyps themselves. We call them reefs. They can be even larger in scale / than
- 5 the most impressive buildings and structures / **made** by humans.
過分・後修

II. 1-2 の解説

For uncounted generations,/ trillions upon trillions of coral polyps / **have lived and died**,/
無数の世代の間、 /何兆ものサンゴポリプが /生きて死んで来た、/
leaving behind a substance / (**called** limestone).
物質を後に残して /(石灰岩と呼ばれる)。

leavingは現在分詞で、「付帯状況」の意味になるのはいいですよ。上の訳は「残して」としましたが、「残しながら」でもOKです。「連続」の意味で、and leave ~「そして~を残している」とやれなくもないですが、前者の方が日本語のニュアンスとしてしっくり来ると私は思います。ここら辺は読み手の解釈次第です。leavingの意味上の主語は、文の主語でもあるtrillions upon trillion of tiny creaturesです。英文を読む時には常に文の主語を念頭に置いておかねばなりません。calledは過去分詞で直前の名詞句を説明しているのもいいですよ。「どんな物質かな？」と、さっと頭の中で自問自答しながら読みます。そうすれば頭に残り易く、返り読みする必要がなくなり、早く読めます。完了時制を構成しているlivedとdiedも過去分詞なので、この文は、三つの過去分詞(called, lived, died)と一つの現在分詞(leaving)を使っています。因みに、英語でgeneration「世代」と言う場合、人間の一世代は30年を意味しますので覚えておいて下さい。

資料 2 - 1 『準動詞の品詞と機能一覧表』 A4ハンドアウトの上半分

準動詞（不定詞[to 不定詞・原形不定詞]、動名詞、分詞）を品詞と機能の観点からとらえる (V1.2)

IAE II D&H

1. 文法上の観点からの分類

①-1 to 不定詞 (to infinitive)

- A. 名詞用法 … 動詞と名詞両方の機能を持つ ⇒ 主語[S]、目的語[O](特定の動詞のみ)、補語[C]になる。主語は主に真主語で使う。
疑問詞(wh-to V)に続く場合は完全に名詞化するので、前置詞の目的語[前 O]でも使える。
- B. 形容詞用法 … 動詞と形容詞両方の機能を持つ ⇒ 後ろから前の名詞を修飾する[限定・後置]、補語[C]になる[叙述]。
- C. 副詞用法 … 動詞と副詞両方の機能を持つ ⇒ 動詞、形容詞、副詞、(述部・文全体)を修飾する。

①-2 原形不定詞 (Bare infinitive) 単に、「原形」とも言う

- A. 名詞用法 … help の目的語[O]として使う(to 不定詞の to が省略された例外的な形)。
- B. 形容詞用法 … 使役・知覚動詞と help の SVOC の補語[C](help は to 不定詞の to が省略された例外的な形)で使う。

②動名詞 (Gerunds)

動詞と名詞の両方の機能を持つ ⇒ 主語[S]、目的語[O]、補語[C]、前置詞の目的語[前 O]になる。to 不定詞の名詞用法と共通点が多いが、より名詞に近い。目的語として使う場合、特定の動詞のみで使う。

③分詞 (Participles)

- A. 現在分詞 … 動詞(進行的・状態)と形容詞の両方の機能を持つ ⇒ 名詞を修飾する[限定・前後置]か、補語[C]になる[叙述]。
- B. 過去分詞 … 動詞(完了・受動的)と形容詞の両方の機能を持つ ⇒ 前から名詞を修飾する場合、完了の意味になり[限定・前置]、後ろから名詞を修飾する場合、受動的な意味になる[限定・後置]。または、補語[C]になる[叙述]。
- C. 分詞構文 … 現在分詞、過去分詞によって構成される句が、理由・時・付帯状況等を補足的に表す副詞句として機能する。

※1 名詞を修飾する(説明する)形容詞の用法を「限定用法」といい、補語になる用法を「叙述用法」という。このハンドアウトでは、それぞれ、「限定」「叙述」で表示している。

※2 「動詞の機能を持つ」とは、準動詞の後ろはその動詞の使い方をするということ。例えば、OやCや副詞(句)が来るということ。

資料 2 - 2 『準動詞の品詞と機能一覧表』 A4ハンドアウトの下半分

2. 準動詞機能分類一覧表 [準動詞これだけの表]

		①不定詞 (Infinitives)					②動名詞 (Gerunds)	③分詞 (Participles)		
		①-1 to 不定詞			①-2 原形不定詞			A.現在分詞	B.過去分詞	
		A.名詞用法	B.形容詞用法	C.副詞用法	A.名詞用法	B.形容詞用法				
品詞	動&名	●			●		●			
	動&形		●			●		●	●	
	動&副			●				●	●	
機能	S	●					●			
	O	¹ ◎			⁴ help の O		⁶ ◎			
	C	●	●[叙述] SVC, SVOC			⁵ 使役・知覚・help の SVOC	●	●[叙述] SVC, ⁷ SVOC		
	前 O	² ▲wh-to V					●			
	形		●[限定・後]					●[限定・前後]		
	副			³ ●[5種]					⁸ ●C.分詞構文	
補足説明		1. O で使う時は V が限られる (⇒7) 2. ▲疑問詞 + to 不定詞 は完全に名詞句化するの で、前置詞の目的語も OK 3. 副詞用法の 5 種 ①目的 ②理由・原因 ③判断 の根拠 ④結果 ⑤形容詞修飾			4. help V(原), help to V の両方あり 5. help O V(原), help O to V の両 方あり。使役の get は to V を取る get O to V。使役・知覚は、受動態にする と原形が to 不定詞になる。		6. O で使う 時は V が 限られる (⇒1)		7. 知覚(使役)動詞の C にもなる ※分詞構文は副詞句になる 8. with を用いて付帯状況を表 し、C の位置で使う with O C	
その他用法 及び 文法的機能		上記の他に be to 不定詞の形式ばった言い方あり、 ①予定 ②運命 ③義務・命令 ④可能 ⑤意思、の 5つの意味がある。			①助動詞とともに用いる ②命令文で用いる ③仮定法現在で用いる		助動詞 be と 進行 時制 を 作る		①助動詞 be と 受動態を作る ②助動詞 have と完了 時制 を 作る	

※[限定・後]とは、名詞の後ろについて前の名詞を修飾。[限定・前後]とは、名詞の前後どちらにもについて名詞を修飾できるということ。

6. 質問紙調査の実施

質問紙調査の実施要領と有効回答率

- ① 担当した2年生のIntermediate Academic English II (110分14回授業)の2つのクラス(同学部の異なる学科)に協力を依頼した。2年生は1年次の成績に基づき、AdvancedとIntermediateの2つにレベル分けされている。
- ② 質問紙はWORDで作成し、学生は学内システム(Moodle)を使い、WORDファイル形式で期末テスト終了後に提出してもらった。
- ③ 質問紙は10個の選択回答と任意の1つの自由回答で構成。自由回答質問は質問主旨と関係ない1つの回答以外なかった。
- ④ 対象者51名中、37名から回答を得た(回収率72.5%)。その内、4名から研究使用を望まない意思表示があったので、有効回答数は**33**、有効回答率は**64.7%**であった。

7. 質問紙調査の結果 (1)

Q1 to不定詞の3用法に関する理解が深まりましたか。(n=33)

① 大いに理解が深まった

8人(24.2%)

② 少し理解が深まった

22人(66.7%)

9割以上が理解深まる

③ 変わっていない

理解出来ていない状態が不変

1人(3.0%)

理解出来ている状態が不変

1人(3.0%)

⇒元々理解出来ている学生僅か

④ かえって理解出来なくなった

0人(0.0%)

⑤ 分からない

1人(3.0%)

7. 質問紙調査の結果 (2)

Q2 動名詞の使い方に関する理解が深まりましたか。(n=33)

① 大いに理解が深まった

7人(21.1%)

② 少し理解が深まった

24人(72.7%)

9割以上が理解深まる

③ 変わっていない

理解出来ていない状態が不変

0人(0.0%)

理解出来ている状態が不変

1人(3.0%)

⇒元々理解出来ている学生僅か

④ かえって理解できなくなった

0人(0.0%)

⑤ 分からない

1人(3.0%)

7. 質問紙調査の結果 (3)

Q3 分詞（現在分詞・過去分詞）の使い方に関する理解が深まりましたか。

[無効回答 1 件有り] (n=32)

① 大いに理解が深まった	7人(21.9%)	} 9割以上が理解深まる
② 少し理解が深まった	23人(71.9%)	
③ 変わっていない		
理解出来ていない状態が不変	0人(0.0%)	
理解出来ている状態が不変	2人(6.3%)	⇒元々理解出来ている学生僅か
④ かえって理解出来なくなった	0人(0.0%)	
⑤ 分からない	0人(0.0%)	

7. 質問紙調査の結果 (4)

Q4 分詞構文に関する理解が深まりましたか。(n=33)

① 大いに理解が深まった	10人(30.3%)	} 9割以上が理解深まる
② 少し理解が深まった	21人(63.6%)	
③ 変わっていない		
理解出来ていない状態が不変	2人(6.0%)	
理解出来ている状態が不変	0人(0.0%)	⇒元々理解出来ている学生なし
④ かえって理解出来なくなった	0人(0.0%)	
⑤ 分からない	0人(0.0%)	

⇒ ①の回答数がQ1～3より多かった。これは分詞構文は授業で時間をかけて説明した結果が反映されていると考えられる。

7. 質問紙調査の結果 (5)

Q5 動名詞と現在分詞の区別が出来るようになりましたか。(n=33)

① かなり出来るようになった

3人(9.1%)

② 少し出来るようになった

23人(69.7%)

肯定的回答 8 割弱

③ 変わっていない

出来ない状態が不変

4人(12.1%) ⇒出来ない学生増える

出来る状態が不変

2人(6.1%) ⇒元々区別出来る学生僅か

④ かえって理解出来なくなった

0人(0.0%)

⑤ 分からない

1人(3.0%)

7. 質問紙調査の結果 (6)

Q6 動詞の過去形と過去分詞形の区別が出来るようになりましたか。(n=33)

① かなり出来るようになった

4人(12.1%)

② 少し出来るようになった

23人(69.7%)

肯定的回答 8割強

③ 変わっていない

出来ない状態が不変

3人(9.1%) ⇒出来ない学生やや増

出来る状態が不変

3人(9.1%) ⇒元々区別出来る学生僅か

④ かえって理解出来なくなった

0人(0.0%)

⑤ 分からない

0人(0.0%)

7. 質問紙調査の結果 (7)

Q7 準動詞を相互に比較することで各準動詞の理解が深まりましたか。(n=33)

① 大いに理解が深まった

4人(12.1%)

② 少し理解が深まった

21人(63.6%)

③ 変わっていない

理解出来ていない状態が不変

4人(12.1%)

⇒比較になると理解出来ない学生増

理解出来ている状態が不変

1人(3.0%)

⇒元々理解出来ている学生僅か

④ かえって理解出来なくなった

0人(0.0%)

⑤ 分からない

3人(9.1%)

8割弱が理解深まる

7. 質問紙調査の結果 (8)

Q8 Q7で①と②を選択した方のみお答えください。(n=25)

準動詞への理解が深まることで、英語・英語学習に対する意識や、英語学習自体に何か変化がありましたか。プラス面だけでなく、マイナス面と考えられることも含めてお答えください。

① かなりあった

3人(12.0%)

② 少しあった

14人(56.0%)

③ 変化はない

嫌い・苦手な状態が不変

4人(16.0%)

好き・得意な状態が不変

2人(8.0%)

④ 分からない

2人(8.0%)

準動詞の相互比較で理解が深まった

学生の7割弱に意識変化あり

[回答者全体に対しては約5割(17/33)]

7. 質問紙調査の結果 (9)

Q9. Q8で①と②を選択した方のみお答えください。[17名(51.5%)が対象]

それはどのような変化ですか(複数回答可)。 ※回答数と回答者数が偶然一致

英文が理解しやすく(=読みやすく)なった	12人(36.4%)	12/33(36.4%)	全回答者割合
英文の構造がよく分かるようになった	9人(27.3%)	9/33(27.3%)	〃
英文を正確に読めるようになった	2人(6.1%)	2/33(6.1%)	〃
英文を速く読めるようになった	2人(6.1%)	2/33(6.1%)	〃
品詞や文型を考えるようになった	4人(12.1%)	4/33(12.1%)	〃
辞書で動詞を調べるようになった	3人(9.1%)	3/33(9.1%)	〃
文法書などを参照するようになった(ネット検索を含む)	1人(3.0%)	1/33(3.0%)	〃

⇒ 選択肢にはマイナス面の変化項目も入れたが、選択した学生はいなかった。

7. 質問紙調査の結果 (10)

Q10 ハンドアウト『準動詞の品詞と機能一覧表』が準動詞の全体像を理解するために役に立ちましたか。(n=33)

① 大いに役に立った	16人(48.5%)	} 肯定的回答 9 割以上
② 少し役に立った	15人(45.5%)	
③ あまり役に立たなかった	1人(3.0%)	
④ 全く役に立たなかった	0人(0.0%)	
⑤ 分からない、どちらとも言えない	1人(3.0%)	

⇒ **役には立ったと思ったとしても、理解には至っていない学生が若干名いるので、役に立つ＝理解が深まる、ではないことに注意が必要。**

7. 質問紙調査の結果に関する考察 (1)

結果に関する考察 1

- 授業開始段階で準動詞を自信を持って理解出来ていると回答した学生はごく僅かであった。
- 授業の結果、学生の各準動詞と分詞構文の理解は **9割以上**深まった。
- 他方で動名詞と現在分詞、動詞の過去形と過去分詞形の区別については、各準動詞程には理解は深まっていなかった。
- 準動詞を相互に比較することで、学生の各準動詞の理解は **8割弱**深まった。
- 各準動詞の理解が深まった **8割弱(25/33)**の学生の内、 **7割弱(17/25)**に意識変化が生じた。これは全回答者の**約半数(17/33)**に相当した。
- 意識変化のあった17名の意識変化内容はすべて肯定的なものであった。

結論：かなり限られた時間の授業であっても、準動詞に焦点を当て、準動詞を比較対照する学習 (=教授)方法には、学生が英文をより良く理解するための学習効果や、英語学習習慣の良い方向への変化があると考えられる。

7. 質問紙調査の結果に関する考察 (2)

結果に関する考察 2

- 準動詞を自信を持って理解出来ていると答えられる学生は極めて少ない。
⇒ **高校、大学1年を経て習得出来ていない学生が圧倒的多数。**
- 英語の基礎が身につけていない学生には、いきなりの準動詞の解説は内容が難し過ぎて効果がほとんどないと考えられる。
- 質問紙の回収率72.5%を考えると、英語が苦手、嫌いな学生は質問紙調査に協力してくれなかった可能性がある。
- 分詞構文に関する回答から分かるように、各準動詞の説明にもっと時間を費やせば、さらに理解度が上昇したと考えられる。
- 動名詞と現在分詞、動詞の過去形と過去分詞形の区別については、ミニテスト形式でテストを実施したり、問題を考えさせたりすれば、もっと理解度が上昇したかもしれない。
※一度だけ、ZOOMのブレイクアウトルーム機能を使って準動詞の問題を話し合っ
て解答してもらったことを実施した。

8. 今後の研究に向けて

今後の課題：より精緻な質問紙調査の結果を得られるようにする。そのためにやるべきこと、及び、現在実践していること。

- 準動詞理解のための前段として文法の講義を授業に組み込む。項目は、「品詞」「句と節」「5文型」「受動態」。その後「不定詞」「動名詞」「分詞(分詞構文含む)」「準動詞のまとめ」の授業を行う。現在、他大学で実施中。
- 質問紙調査の項目を増やす。授業開始時の各文法項目の理解度を尋ねる質問を組み込む。
- 質問紙の回収率と有効回答率を高める。
- 授業内のクイズ、ミニテストや、定期試験で、理解度の向上と知識の定着を図る。
- 他大学で後期末に同様の質問紙調査を実施する予定なので、その結果を可能な範囲で今回の調査結果と比較する。
- 『準動詞の品詞と機能一覧表』を更に良いものへ改訂する。
- 来年度の英米文化学会の大会または例会で再度、同テーマで研究発表する。

参照文献

Paul Macintyre, David Bohlke (2020). 2A Reading Explorer Third Edition. (p. 85)

Boston: National Geographic Learning

西原俊明, 西原真弓, Pino Cutrone (2019). 『Good Health, Better Life 健康的な生活

から学ぶ大学総合英語』 (p. 22) 東京：金星堂

薬袋善郎 (2000). 『英語リーディング教本』 (p. 69) 東京：研究社

参考文献

佐伯智義 (1997). 『英語の科学的学習法—文法的分析でマスターする』 東京：講談社